

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390200410		
法人名	株式会社大洲産業		
事業所名	グループホーム清花		
所在地	熊本県八代市郡築1番町103-9		
自己評価作成日	令和4年2月10日	評価結果市町村受理日	令和4年6月21日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.gh-seika.com/">http://www.gh-seika.com/</a>
----------	-----------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和4年2月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者のこれまでの生活歴・生活史を大切にしたい支援を心がけています。これまでできていたことは可能な限りホームでも出来るように、どうしたら心地の良い暮らしが提供できるか、考えながら日々のケアに当たっています。これまでには外出支援にも力を入れていましたが、コロナ禍で、なかなか思うように出かけられない生活が続く中、どうにかして外出支援に変わる楽しみを提供しようと職員が協力・工夫し、季節ごとの行事・イベントに取り組んでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

コロナ禍の中での開設という状況の中で、管理者を中心として自分たちで作りに上げる事業所としてモチベーションも高く、入居者個々の思いに寄り添い、清掃活動(お寺や水路等)に積極的に関わる等地域に根ざすべく努力を惜しまないホームである。入居者も頻りに自宅と行き来したり『したいこと・欲しいこと』に注視したケアは、実に生き生きとした生活として表われている。外出制限の中でも人流を見ながらの外出(桜・あじさい・コスモス・紅葉見学・初詣など)等の楽しみ毎を支援する他、ホーム内ではバスの鑑賞会等職員の創意工夫が入居者の笑顔ある日常として生かされている。ホーム生活を自宅生活の沿線にあると位置づけした支援が居室作りや食支援に表出され、家族と協力しながら、ホームの初期基盤作りに邁進するホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の理念を職員の目に付くところに掲示し、仕事を始めるときには意識して仕事をするようにしている。日々のケアで対応に困った事など、カンファレンスを行い、理念に立ち返り考えるようにしている。	法人の3事業所同じ理念を継続しており、清花独自の理念はまだ出来てはいないが、ロッカー内に掲示した理念を読むことから一日をスタートさせている。毎月のカンファレンス時に理念に即したケアが出来ているかを振り返るとともに、迷ったときの原点として捉えた理念を全職員が共有している。	新年度のスタートに当り、ホームが目指すケアや地域の中での事業所としての意義等を踏まえた独自の理念を検討されることを望みたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で、思うように交流を図れていないが、町内会長や、包括支援センターなどにホームの状況をお知らせしたり、地域の清掃などには職員も参加し、可能な限り交流できるように心がけている。	コロナ禍で地域住民との交流に制約はあるが、近隣住民との挨拶や歓談、お寺の掃除や水路等の清掃活動への参加により住民との交流促進及び啓発の一環としている。また、近くからの入居者の存在が、近隣住民との関係を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所における利用者の暮らしぶりや、認知症の人への理解や接し方などについて、十分に発信できまでには至っておらず、今後、地域に向けて貢献できるように働きかけていきたいと思う。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の開催が困難で、書面でのお知らせになっているが、それにホームでの様子をより分かって頂けるように、写真を多く掲載している。写真の様子を見た家族からご意見や感想など頂けるようになり、サービス向上につながっている。	運営推進会議は書面審議として地域包括支援センター・行政・町内会長等委員に配布し、意見を出してもらおうよう依頼している。また、全家族にも配布しており、不明な点や要望等が出され、サービスに反映させている。二ヶ月間の活動報告や研修報告、入居者状況、ひやりはっと・事故報告等の他、写真による日常の様子は見る者を引きつけ、生き生きとした入居者の表情がホームでの日常を表出している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナの影響もあり、ホームに来て頂く事ができない状況ではあるが、運営推進会議の資料を毎回提出しホームの現状等報告している。また、研修会のお知らせやコロナの最新情報などこまめにメールで情報提供などもありとても助かっている。	運営推進会議の報告書を持ち届け現状を報告をしたり、事故報告書提出時にアドバイスを得ている。介護認定更新を代行し、訪問調査時に情報交換を行っている。行政から新型コロナワクチン接種等の新情報や研修等の情報を頻回にメールを通じて発信されており、感染対策に繋げている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束について定期的に勉強会を行い、慎重に日々のケアを行っている。スタッフ間でも気になる言葉使いや対応についての気づきは、誰かに相談し振り返り、改善策を検討するようにしている。	「虐待・身体拘束」について、グループワークでの勉強会、年2回はチェックリストにより個々のケアを振り返り、グレーゾーンについては更に気をつける必要があると認識している。転倒リスクの高い方には家族に説明し同意を得たうえで足元センサーや離床センサーを使用している。また、外出傾向の高い入居者等個々の状況を把握し、所在確認を徹底している。	グレーゾーン等については職員同士が注意喚起出来る関係を築かれるよう期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に虐待の芽チェックリストを用いて、自分のケアについて振り返りをすると同時に、勉強会なども行い、虐待防止について学ぶ機会を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護や成年後見制度などについて勉強会で学べるようにしている。自分がしているケアは、利用者の権利や尊厳を侵害していないか常に意識してケアに当たるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に当たっては、重要事項説明書・解約書の内容を分かりやすく説明し、理解・納得して頂けるように意識している。また、料金改定等契約内容に変更があった際も、都度説明し同意を得るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者からの要望には都度スタッフで話し合い、本人の希望に添えるよう対応している。コロナ禍で家族の面会が制限され、なかなかホームの様子を知って頂ける機会が減っているが、定期的にご家族に連絡し意見を伺ったり、お手紙を出したりして要望等を引き出すように努めている。	入居者からの要望等は日々の生活の中で聞き取りし、こうしたい等には随時検討し、可能な限り叶えている。コロナ禍に家族の面会もままならない状況にあり、パーティションを付け中の様子を見てもらったり、窓越し面会等を捉え、要望等を聞き取りし、カンファレンスで話し合い実現させている。	家族との交流が出来ない状況にあり、コロナが収束すれば誕生日会等にお誘いしたいとの意向もあり、タイミングを見ながら計画されることを期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年に2回面談を行い、職員の意見や要望を聞き、代表に伝えるようにしている。また、それ以外でもスタッフとコミュニケーションをこまめに図り、都度対応するようにしている。	管理者は日々ケアに入りながら職員とのコミュニケーションを図り、朝・夕の申し送りにより入居者の状況を共有している。また、毎月のカンファレンスや緊急にはその都度職員との話し合いを行い、業務の提案や雇用関係等が挙がり、管理者を通じて代表に上申する体制としている。年に2回は管理者は個別面談を行う等、職員が意見や要望を出す機会を多く作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表は職員の体調や家庭環境など様々な要望にできる限り答えてきている。代表がホームに来ることができていないが、職員の要望は管理者から代表に伝え、意見が言いやすい環境になっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍という事もあり、研修に参加する機会が減っているが、内部研修として自分たちで資料を準備し研修を行った。また、今年度開設後初めて介護経験のない新人が入職し新人育成マニュアルの必要性を感じた為、作成している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	定期的に他の事業所と勉強会を開催し、その場で様々な意見交換ができ、交流が図れている。様々な意見を聞くことで、ケアの質の向上にもつながっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前から、可能な限り面会に訪れ顔見知りの関係を築けるようにしている。本人としっかり対話し困っている事不安な事を知りチームで共有し本人の安心につなげられるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に必ずホームに何度か来て頂き、ホームの雰囲気や生活の様子を見て頂くようにしている。その時に家族の思い・希望などを伺いホームで出来ることを検討している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族が何に困り、何を望んでいるのか、一緒に考え入居を含め本人に必要なサービスを検討するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者の出来る事・出来ない、したい事・したくない事などを知り、利用者が自分のことは自分で進んでできる様な関わりを目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で面会制限が長く続き、家族との十分な関わりが持てない状況ではあるが、ホームでの様子を報告したり、写真付きで様子をお知らせし、絆を大切にするケアを心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で馴染みの場所や馴染みの人に会いに行くことができていないが、本人や家族から情報を得て可能な限り馴染みの生活がホームでもできるように工夫している。	馴染みの関係はコロナ禍により家族中心であるが、自宅へ頻回に行き来される方、新聞を読んだり、携帯電話を持参し家族との連絡や、かかりつけ医に直接連絡をされるかた、自宅での生活の延長線上にあるとしてホームでも晩酌をされる入居者、畳での自宅生活を継続させるべく居室を畳敷きにされる等家族の協力も得ながらこれまでの在宅生活を継続させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士トラブルにならないよう、様子を見ながら、対応している。名前を忘れてたり、顔が分からなかったり日によって関係性が違うが、都度利用者の状況に合わせて対応している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も、施設や入院先に出向き様子を伺ったり、ホームでの本人の状況や好み、生活習慣など必要な情報提供を行っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意思確認は必ず行うようにしている。こちらの思い込みで判断しない様に気を付けている。そして、可能な限り本人の希望に添えるようなケアを実践している。	入居者の中には“したいこと・欲しいこと”を直接に申し出られることもあり、その時の状況により対応するとして家族に代言し実現させることもある。また、職員は思い等を言い出されない方には話やすいように対応し、意思疎通の難しい場合には行動や表情から推察しながら、本人の思いに寄り添っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人・家族・以前の担当ケアマネなどから入居前の話を聞き、入居前の生活、その人らしい暮らしが入居後の継続できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	いつもと違う言葉や表情、行動など注意深く観察し、それが意味する事を考えスタッフ間で共有するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	状態変化時など細目に担当者会議を開き、本人・家族の希望を確認しプランに反映している。また、利用者ごとに担当スタッフをつけることにより、家族・本人の思いをより深く関ることで、現状に即したプランになっている。	入居前の状況により対応策等として気分の変動や食思意欲低下、排泄後の対応、ふらつきによる転倒リスク等を検討し、本人及び家族の意向を更に確認し、新たなプランを作成している。短期目標3ヶ月毎のモニタリングにより方向性を見極めている。いつまでも今の暮らしができるように傾聴や会話・歌や本読みなど具体的な援助内容を掲げる等具体的なプランである。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々のケアでの気付きや、ケアの変更箇所などは記録に残し、他のスタッフと共有できる様マーカーなどで印をつけ情報共有している。介護計画の評価も毎日行い必要時カンファレンスで話し合い見直すようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	可能な限り利用者の『したい気持ち』を尊重できるように心がけている。コロナ禍でなかなか会いたい人に会えなかったり行きたい所に行けなかったり思うようにいかないが、工夫しながら対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	馴染の美容室やお店などには、家族の協力を得ながら出かけるような支援をしている。また、月命日のお参りにはスタッフも一緒に行ってお参りしたり畑仕事などはご近所の方と行ったりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居後もそれまでのかかりつけ医の診察を続けて頂けるように、それぞれの主治医話し合い対応している。状態が変化し、受診が続けられなくなった時も可能な限り往診対応して頂けるように調整し馴染の医師から診察を受けられるように支援している。	入居前からのかかりつけ医を家族により受診されているが、困難になられ訪問診療に変更された方もおられる。専門医についても、家族対応で受診されている。家族により受診された後は、結果を聞き記録に残している。協力医療機関については新年度より、訪問診療可能な医院へ変更予定である。歯科は2か所の医院から希望や必要時に訪問により治療が行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師2名体制を確保することで、日頃の健康観察が十分に行え、状態変化時にもいち早く気付き対応する事が出来ている。介護職の気がかりを直ぐに看護職に相談できる体制が出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院になった場合、スタッフも同行し、病院関係者にホームでの状態について伝え安心して入院できる様支援している。また、早期に退院できるように、細目に情報交換行い受け入れ態勢確保している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時の契約時重度化した時の対応や看取りについての事なども説明している。状態変化時などもその都度ご家族と密に連絡を取りながら、本人・家族の思いを聞き・主治医と連携し対応検討している。他事業所での看取りについて、振り返りを一緒にすることで、終末期のケアについて学びを深めている。	入居時に重度化や終末期の対応について説明し、事前指定書も作成されているが、開設して2年たらず、家族の中は終末期について決めかねておられる現状も有り、ケアプラン説明時に今後の気持ちを聞き取りしている。地域の5事業所による合同研修会のテーマとして「尊厳のある看取りについて事例を通して考える」を挙げ、同法人のホームで実施された看取り支援の振り返りが研修の中で報告されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応についてはマニュアルを作成し、急変時落ち着いて対応できるように備えている。また、定期的に研修を行いAEDの操作方法や急変時の対応について消防署から出向してもらったりしながら学びを深めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災訓練と共に地震発生時の訓練なども合わせて災害時の訓練を定期的に行っている。コロナ禍で地域や家族参加の訓練は実施できておらず、可能になったら実施し、災害対策について一緒に考えて行きたい。	コンセントの埃からの出火を想定した訓練や防災について机上訓練、火災訓練として夜間職員が2名いた想定で実施し、入居者も避難を体験している。職員の質問として、自然災害発生時夜間であれば職員一人でどの様に避難するのか等も挙がっており、災害時の安全確保について検討を重ねたいとしている。	感染症の状況を見ながら、地域や家族の参加を得た訓練や、災害対策について検討していきたいとしており、実現が期待される。また、防犯対策についても今後の課題とされることを期待したい。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	日頃より、利用者の気持ちを考え、利用者の立場に立ったケアをするようにしているが、ホームでの生活が長くなり関係がなれ合いになり、配慮にかけた声掛けや対応を耳に目にする場面もある。今一度振り返り検討必要。	職員はチェックの芽シートを活用し、ケアの振り返りを行っている。広報紙の写真掲載など個人情報の使用については家族の了解を得ており、写真も入居者の表情など十分配慮している。勉強会では、夜間のオムツ交換時に、他の部屋の音に気付く為、戸を開けて支援していることなど、グレーゾーンについても話し合っている。	職員の馴れ合いの言葉、特に笑い話の時の会話を課題としている。また、掃除で居室へ入る際は本人に確認するが、他の用(タオルを取りに行くなど)では、了解を得ず入室してしまうようである。課題について申し送りなど日々の中で振り返る事も良いと思われる。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食が進まない方に対し、どうして食べれないのか、何だったら食べられるのか本人に確認し、食べれるものを提供する等、本人の話をしっかり聞き、対応する様になっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人一人のペースに合わせて、起床時間や就寝時間、食事の時間や入浴時間等希望に沿って対応するようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人が心地よく過ごせるように、朝の整容には時間をかけ、鏡の前でなるべく自分でできるような支援をしている。また、白髪が気になる利用者のリクエストで髪染めなども職員が行い身だしなみの支援に努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	少量ずつ品数多く提供し、旬の野菜を取り入れた食事に気を付けている。一人一人の好みも配慮し、形態や内容なども変えて提供している。また行事や誕生日の時等のいつもと違う特別な食事にも力を入れている。	法人系列ホーム間で献立を作成し、米や精肉・鮮魚など専門店を利用し調理が行われている。季節感のある日々の食事や行事食、手作りケーキなどで祝う誕生会など、食事は入居者の楽しみとなっている。キザミやミキサ一食など嚥下力に応じた食形態で提供している。高齢者の食事について、地域の5ホーム合同研修会の中で、「日頃の献立を通して考える」と題した勉強会を開催し、食事支援に活かしている。	手作りの食事は家族にも好評である。職員は同じ食事を摂り、思いを共有しながら、献立や調理に活かしている。晩酌を楽しむため、昼の食事量の調整やお粥への要望を出される方など柔軟に対応されており、今後も食が楽しみとなるよう継続されることと大いに期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や水分摂取量などは毎日記録し、必要な栄養・水分量が摂取できるように気を付けている。摂取が進まない時は違うものを提供したり、時間をおいて再度声掛けたり、環境を変えたり工夫し対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアの声掛けし口腔内の清潔保持に努めている。自立の方も時々口腔の観察を行い異常の早期発見に努めている。また歯科医とも連携を図り口腔ケアの困難な方や定期的な状態観察が必要な方は定期的に診察・ケアをお願いしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の失敗が無い様に排泄パターンを把握し、トイレの声掛けなどで対応している。トイレの場所が分からなかったり、トイレの動作が分からなくなる利用者もいる中、利用者の様子を見ながらトイレへさりげなく誘導したりとプライバシーへの配慮も気を付け対応している。	リハビリパンツを使用される方が殆どであるが、布パンツで過ごされる方もおられる。トイレは3か所設けられ、居室の近くなど使い慣れた場所へ独歩や手引き歩行で移動されている。夜間も自立の方もおられ、安全な誘導、見守りに努めている。トイレへの誘導は、声の掛け方などプライバシーに配慮することを共有している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	なるべく自然排便が促せる様に、水分摂取量や食事内容に気を付けている。腹部マッサージや適度な運動、腹圧がかけやすい姿勢など工夫している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴したいタイミング時間帯で入浴できるよう支援している。入浴を嫌がる利用者には時間話ずらしたり、職員を変えたり、好きな音楽をかけて促したり、入浴剤や柑橘類を入れたり工夫している。	入浴は基本的に週3回支援しているが、毎日の入浴や1日置き等入居書の希望により支援している。好みの湯温や身体をしっかり温めて入ることが好きな方など、個々の楽しみ方を把握しながら対応している。また、入浴剤の使用や柚子やばんぺいゆの使用により季節感を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間も一人一人の生活パターンに合わせて対応している。室温や湿度などにも気を付け安眠を促している。湯たんぽや電気毛布などで布団を温めたり、就寝前は懐かしい音楽を聞いて心を落ち着かせる支援をしたりしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬事表ファイルを作成し、処方されたら新しいものに更新し服薬内容の把握に努めている。服薬ミスの無い様に服薬袋にも薬事表を表示し、内容に間違いがないか確認。さらに服薬時と服薬セット時は必ずダブルチェックを行い間違いのない様にしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物を畳んだり、テーブル拭き、床のモップかけなど役割の支援を行っているが、その事が生活の張り合いや喜びまでに繋がられているかは定かではなく、引き続き利用者のワクワクを引き出せるケアを考えて行きたい。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ前のような外出支援はできない状況ではあるが、人のいない公園に弁当を持ってお花見に行ったり、ホーム周辺の散歩、ドライブで風景を楽しんだり、できる範囲での外出を楽しむようにしている。	この一年も感染症の状況を見ながら、桜やひまわり、コスモス、紅葉見物など季節の外出を支援している。その際は人流の少ない時間帯を選び、弁当やおやつを持っていくなど楽しみが増すよう工夫している。また、初詣は10日過ぎに数人で2回に分けて出かけている。日常的には敷地内の散歩や庭先での日光浴、菜園の様子を見る等入居者に応じて支援している。外出の様子を写した写真からもホームの取組が窺える。	ユーチューブを活用して紅葉や桜の花見を楽しんでいる。外出に代わる楽しみとして継続した取組に期待したい。身体の状況から初詣に参加できなかった入居者もおられ、今後はホーム内でおみくじなど新年を祝う楽しみ事を検討されることも良いと思われる。職員のアイデアや工夫に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族と話し合い、自分でお金の管理をしている方もいるが、ほぼ職員管理で、買いたいものがある時はそれから買うようにしている。通信販売が好きな方などは自分で連絡し購入される事もあり、可能な限り自分で買い物できる様に支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っている方もおり、家族とは好きな時に連絡している。電話でお話や手紙を書いたりできない利用者には写真や近況報告のお手紙を職員が書き様子をお伝えしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ソファや椅子を数多く配置し、気分で様々なところに座れるようにしている。テレビやテーブルの配置は工夫が必要と思うが、利用者の安全な移動動線を優先している為変更が難しい状況。コロナ感染症等もあり、換気・加湿・除菌などには特に注意し対応している。	共用空間では安全面などに配慮しソファや椅子を配置し、テレビ視聴や新聞を広げるなど好きな場所で空間となっている。コロナ感染予防対策として、特に掃除や換気、除菌などに努めており、モップ掛けを入居者も手伝われている。広い廊下を活用した歩行訓練や、掲示された外出やイベント時の写真を立ち止まって見られる様子も確認出来た。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファをホールの色々な場所に配置することで、気分によって居場所を変えることができるようになっている。また、玄関先のスペースや、事務所の窓際なども日光浴には最適の場所で、思い思いの場所で過ごす事が出来ている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の居心地の良さにはこだわり、可能な限り本人・家族の希望を尊重し対応するようにしている。	掃き出し窓の居室は十分な広さとクロゼットを備えている。居室に水槽を持ち込み水の流れを楽しみとする方、水筒に白湯を入れ居室に用意したり、雑誌のある部屋などこれまでの生活環境を継続した居室である。入居者から「畳でゴロリとしながらゆっくりしたい。」との要望を受け、家族により畳を敷き入れた居室では手枕をしながら寛がれる等自宅の浴線上として居心地良く過ごす環境が整備されている。	家族の訪問が制限されており、引き続き居室の様子や不足の品など細やかな報告により、安心に繋げていただきたい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の居室やトイレが分からなくなる方に、分かりやすいような目印を目の高さに表したり、転倒しない様に手すりを数多く設置したりと工夫している。		